HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	コメント ： ワークショップに向けて
Author(s)	鈴木, 一人
Relation	第6回 人文・社会科学系研究推進フォーラム報告書 Ⅰ 講演の記録
Issue Date	2021-03-29
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/83467
Type	conference presentation
File Information	JF6_hokudai_1-13_Suzuki.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

コメント
～ワークショップに向けて

東京大学　公共政策大学院　教授　**鈴木　一人**

今日のお話はとても豊かで、人文学・社会科学がここまでいろいろな形で文理融合というのでしょうか、理系のプロジェクトと文系の様々な知見を共有しながらやっている事例を紹介していただいて、ワークショップをやらなくても何か答えが出ているのではないかと思うぐらい、非常に豊かなご経験と実績が示されたのかなというふうに思います。もちろん堂目先生のおっしゃるように、まだまだ答えが出ていないことはたくさんあって、そういう意味では、人文学・社会科学と自然科学の研究が一緒になってやっていくことというのはまだまだこれから広がっていく余地はたくさんあると思うのですけれども、そういうことが大変チャレンジングであり、かつ、面白い。非常に豊かな研究の土壌がそこにはあるのだということは、今日、いろいろな事例や近藤先生、城山先生の幅広いお話を通じて、大きな可能性を感じました。

ただ、やっぱり文理融合がテーマになる一つの大きなきっかけは、これまでの科学技術イノベーション会議ないしは科学技術基本法で、人文学・社会科学が排除されてきたところから、ようやく国がこの人文科学・社会科学と自然科学の融合というものが重要で、価値のあることだということを認めたことにあると思います。それ以上に、どういうリサーチプロジェクトをつくるのか、それにどうやって予算をつけるのかという、要するに行財政的な問題の中で具体的に解決すべきテーマを、URA の皆さんが見つけて、それをプロジェクト化し、予算要求まで持っていくという新たな課題が浮かび上がってきたと思います。次のワークショップではそれを議論することになるかなと考えています。

既に様々な実績がたくさんありますので、そういうものをうまく生かしなが

ら、事例を生かしながら考えてもらえればいいと思います。

今日、いろいろなヒントがあった中で、高橋先生がおっしゃった「糸かけ曼荼羅」のように、一つのテーマを設定しながら、いろいろな角度で、いろいろな知見を持った専門の先生方がともに協力し合いながら、また、トランスディシプリナリーな手法で、現地の人、実務家、ステークホルダーの人たちと共有しながらやっていくというのが、一つの解決の道筋になっているのかなと思いました。それがどういう形で人文学・社会科学の役割というのと絡んでいくのかというのは、ワークショップでの議論の対象になるかなと思います。

ここで重要になるのは、そもそも科学というのは細分化される方向にある、という点です。これは自然科学だけではなくて、例えば社会科学においても、法学、政治学、経済学その他と、いろいろあって、政治学の中でも、行政学から国際政治学から、いろいろな分野があります。このように科学って放っておくと細分化されていくものなので、その細分化されていく科学をどう結びつけるかというのが、これは自然科学であろうが、社会科学であろうが、人文科学であろうが、常に重要になってくるテーマだと思います。この結びつけ方がうまくいくと、プロジェクトとして面白くなっていくし、社会的な価値というのも大きく出てくるのだろうなというのは、今日のお話をいろいろ聞いて感じたところです。

ですので、9日のディスカッションでは、皆さんとそういうお話ができるのを楽しみにしております。よろしくお願いいたします。